

一 般 演 題

1. ^{123}I -IMP, $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -HM-PAO と非放射性 Xe-CT による CBF study

宮本 勉	細川 敦之	日野 一郎
高島 均	川崎 幸子	佐藤 功
児島 完治	大川 元臣	玉井 豊理
田辺 正忠	(香川医大・放)	

^{123}I -IMP および $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -HM-PAO による RI-CBF-study と非放射性 Xe ガス吸入法を用いた X 線 CT による CBF study を比較検討した。

対象は、昭和61年10月から62年4月までに三者の検査をほぼ同時期に行った脳梗塞 12 症例 (15 件) である。方法は、CBF 低下指数を

$$\frac{\text{ROI ② (normal CBF)} - \text{ROI ① (low CBF)}}{\text{ROI ②} - \text{ROI ③ (background)}} \times 100(\%)$$

として計算し、三者の各組み合わせで回帰直線を求め相関係数の検定を行った。結果は各組み合わせで有意な相関があり、特に PAO と Xe-CT では相関係数 0.778 で、1% 以下の危険率で有意な相関を認めた。Xe-CT との比較検討は、RI-CBF study の定量化へのひとつの試みとして有意義なものと考えられた。

2. Tc- $^{99\text{m}}$ PAO 脳シンチグラフィ (^{123}I -パービューザミンとの比較)

西本 均	山本 洋一	吉田 祥二
吉村 尚子	前田 知穂	(高知医大・放)
赤木 直樹	久保 嘉彦	(同・放部)

脳梗塞 12 例、脳腫瘍 3 例に対して、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -PAO を用いて SPECT を施行し、X 線 CT, ^{123}I -IMP による SPECT と比較検討した。PAO (E), PAO (D) とはほぼ同等の所見を示した。X 線 CT との比較では、PAO (E) の方が病変をやや広く描出する傾向がみられた。IMP (E) と PAO (E) との比較では、病変の描出は IMP (E) の方がやや広範であるが、基底核の描出は PAO (E) の方がより明瞭であった。 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -PAO は ^{123}I -IMP に比し、大量投与が可能であり、かつ容易に標識できる利点がある。しかし、 ^{123}I -IMP (D) でみられる脳代謝を表

わすいわゆる再分布像の所見は $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -PAO では得られなかった。

3. 脳腫瘍における $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -HM-PAO SPECT

森田 浩一	福永 仁夫	小野志磨人
大塚 信昭	永井 清久	王 鋭
村中 明	古川 高子	柳元 真一
友光 達志	森田 陸司	(川崎医大・核)
西下 創一	(同・放)	

脳原発悪性リンパ腫 1 例、転移性脳腫瘍 4 例に $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -HM-PAO (以下 HM-PAO) SPECT を行い、X 線 CT, ^{123}I -IMP, $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -DTPA SPECT の所見と比較し、腫瘍部の血流状態について検討した。

結果：HM-PAO SPECT では、5 例中 4 例で RI 集積は認められなかったが、1 例の肝細胞癌の脳転移例では集積がみられた。 ^{123}I -IMP SPECT でも同様の集積パターンが観察された。しかし、X 線 CT 上の造影効果や $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -DTPA SPECT の所見とは相関は認められなかった。

考察：5 例中 4 例で腫瘍部への HM-PAO の集積は認められず、HM-PAO は転移性脳腫瘍部の血流を表わす可能性は少ないものと思われた。腫瘍部への集積が認められない原因として、腫瘍部には HM-PAO の結合部位が存在しないためと考えられた。一方、肝細胞癌の脳転移例では腫瘍部に RI 集積を認めたが、HM-PAO は生理的に肝への集積が高いため、肝細胞より発生した腫瘍は HM-PAO 摂取能を有する可能性が考えられた。今後、HM-PAO 自体の腫瘍親和性に関する検討が必要と思われた。

4. 進行性核上性麻痺の 1 例

松野 慎介	瀬尾 裕之	川崎 幸子
高島 均	玉井 豊理	田辺 正忠
		(香川医大・放)
山本 光利	(香川県立中央病院・神内)	

進行性核上性麻痺 (PSP) は、1962 年に Steel らが初